『八月十五日・終戦の思い出』

出生・満州国間島省延吉県龍井村

橋口　規

小学校三年まで満州の学校(校名は分からない)、あと一年おきに転勤についてかわる。天津で妹が生まれたが三ヶ月で済南に。汽車の中が暑く、着いた時妹の調子が悪く三日目に死亡。夏休みの間漢口に、支那事変の始まった前日、揚子江を下る時(家族全員日本に帰国のため)、南京を通る時サーチライトで照らされ、駆逐艦二隻が守ってくれた。一時、父の本籍地岡山に……。二年位で又父のいる山東省のチーフへ、そして中学を受けるため大連へ……。下宿の都合で岡山の叔父の家へ、この時弟(次男)と二人長崎まで迎えに来てくれた。岡山一中に入学、三年まではよかったが、学徒動員で始めは百姓さんの加勢が多かったが、いつのまにか水島の三菱航空機で三ヶ月間特訓を受け、その間昭和十七年父が外務省の内勤になり、東京へ。空襲もひどくなったので父は退職し、岡山市役所へ。

私は希望で名古屋へ、(南区塩屋?三菱航空機の下請)何の仕事かと思ったら一日おき汽車に乗せられて、名古屋・神戸間を往復させられ、その間何回か空襲でやられそうになった。何回かくり返しているうち、明日正午重大放送があるので何処にもいかないようにいわれた。

正午の食事をしている時、天皇陛下の鎮痛声で敗戦の知らせがあったが、しばらくはボーッとなって信用できなかった。二・三日はその儘、やっと岡山の本社へ帰るように通達があった。名古屋から貨車で東海道・山陽と入り、岡山に着くと一面焼野原、岡山医大前にあった家はなく立札が立っていた。田舎の伯母の家に帰って見ると次男の行方がわからない。本人がいた倉敷に五回も連絡。或る日ひょっこり帰って来たが、人について徳山にいっていたと言う。しかし、敗戦病『カイセン(皮膚病)』をもらって帰って皆んなに……。

父の友達の世話で福岡の日鉄嘉穂へ、家族全員で九州に渡って来た。その時、兄弟全員『カイセン』にやられ、特に小生が永びき職に出るのが遅れた。

昭和二十八年九大病院で家内と知り合い、米水津村に来た。おばあさんに子供がなかったので養子に入ったのである。